

万国博を期に活発化

国民レベルでの理解を

今年で建国百十年目というカナダにと

って、日本との国民的交流の歴史はほと

んどその建国の歴史に匹敵するほど古い。

例えば、カナダが初めて二人の宣教師を

日本に派遣したのは、自治領カナダが誕

生してわずか六年目の一八七三年のこと

であるし（昨年の本誌「トルドー首相来

日特集号」参照）、また長崎県人永野萬

藏がカナダ太平洋沿岸に達したのは、連

邦建設十年目、ブリティッシュ・コロ

ビアがカナダ連邦に加盟して六年目のこ

とであった。日本に派遣されたカナダの

宣教師たちは、明治期の日本の思想・文

化に多大の影響を与え、日本における近

代教育を進展させた。そしてカナダに移

住した日本人は、新興カナダの開拓・発

展に大きく貢献しただけでなく、日加間

の文化交流のかけ橋ともなった。

こうしてカナダの建国後わずかにして

発展のきざしをみせた日加文化交流であ

ったが、二度にわたる世界大戦のために

その後は大した進展を見せなかった。再

たびその機運が高まってきたのは、ここ

十年來のことである。カナダと日本を文

化的に接近させる新たな契機となったの

は、一九六七年のモントリオールにお

ける万国博覧会と、三年後に日本で開

た大阪万国博である。

「人間とこの世界」というテーマのモ

ントリオール博では、カナダ側の強い要

請によって、テーマ館に日本から京都の

六波羅密寺の僧形座像（平清盛像）や、

霊雲院の山水花鳥円（狩野元信）などの

重要文化財四点を含

む七点の古美術が展

示され、芸能番組に

は歌舞伎が参加して

日本の古い文化の伝

統を披露した。

一方、次回の万国

博を大阪で開催する

ことになっていた日

本は、モントリオ

ール博から多くを学び、

その見学のため多く

の関係者がカナダを

訪問して、アメリカ

やイギリス、フラン

スとも違うカナダの

国情と文化を発見し、

新聞・雑誌・テレビ

にしばしば報ぜられ

るようになった。日

本からの観光客が急

増し、カナダに対する関心が著しく高ま

ったのはこの頃からである。

こうして建国百年の記念文化事業であ

った一九六七年のモントリオール万国博

を未曾有の大成功で飾ったカナダは、万

国博の兄弟国となった日本と当時両国間



大阪万国博で披露された民族舞踊ミュージカル

の貿易が飛躍的に増大したという好条件

もあって、日本での万国博に極めて積極

的に協力した。カナダはこの博覧会の参

加国第一号として参加を表明し、カナダ

館のほか、ブリティッシュ・コロンビ

ア、オンタリオ、ケベックの三州もそれ

ぞれの展示館を建てて参加した。まさに

カナダ・デー当日のトルドー首相の挨拶

の一節のように、「カナダ人にとって日

本は極東でなく、カナダの新しい西方で

ある」という認識を具体化したわけである。

特にこの博覧会の芸能部門で、カナダが

モントリオール交響楽団、カナダ国立バ

レエ団、ミュージカル・コメディ「赤毛

のアン」を始め、多くのフォーク・グル

ープ、ロック・バンド、合唱団を派遣し

てクラシック、バレエ、演劇、現代音楽

と、質量ともにカナダの多彩なところを披

露し、この分野でのカナダの意欲を示し

た。

この万国博前後を境にして活発化して

いった両国の文化交流を、主にカナダの側

から、芸術、学術・教育、人的（スポー

ツなど）交流の三つにわけて振り返って

みると――。

芸術交流

カナダは大阪万国博の前年の一九六九

年、トロント交響楽団を日本に送った。

一九七〇年のモントリオール交響楽団の

来日、一九七四年のバンクーバー交響楽

団の来日とあわせて、三大交響楽団がす

べて来日したことになる。小沢征爾氏が

トロント響を永年指揮したことや、現在

秋山和慶氏がバンクーバー響の指揮をし

ているなど、クラシック音楽の世界では

交流が盛んである。また来年一月にはト